

## 「助けられ」という福祉活動があった！

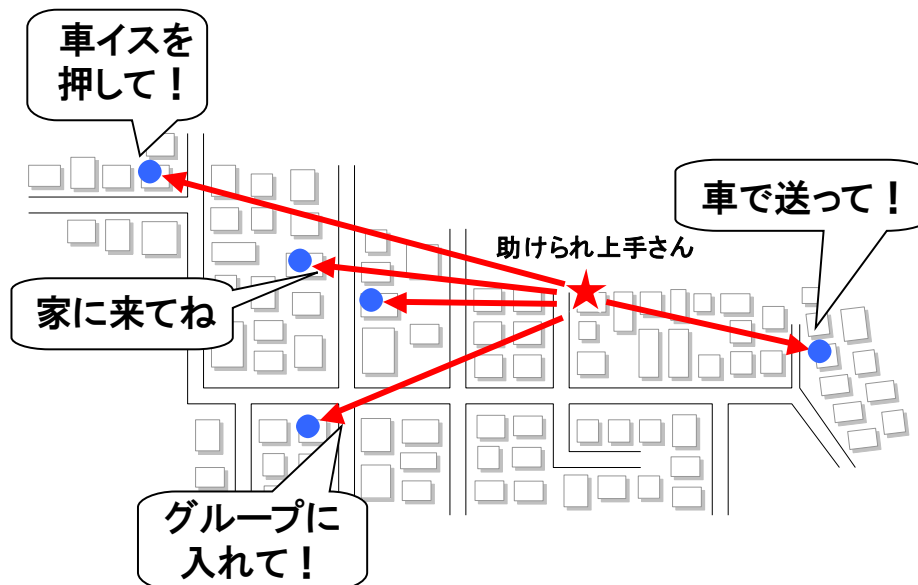
当事者の自助活動は本当はこんなに豊かなのだ

このことは本研究所関連の冊子にはしばしばとりあげているので、読者もご存じだと思う。最近この発想が、少し前進したので、それをご紹介します。

### ■助けるは福祉活動だが、助けられる行為は何でもない？

夫を介護中の主婦が、ご近所に住む5人の女性にあれこれお願い事をしているのを、マップで見つけた。あなたは夫の車椅子を押してね、あなたは夫を病院まで車に乗せてね、という具合だ。

この5人から直接聞いた話である。これを聞いて、図々しい人だなと思う人もいるだろう。しかし彼女は、平気でやってのけている。そして頼まれた相手は全員、快く応じていた。

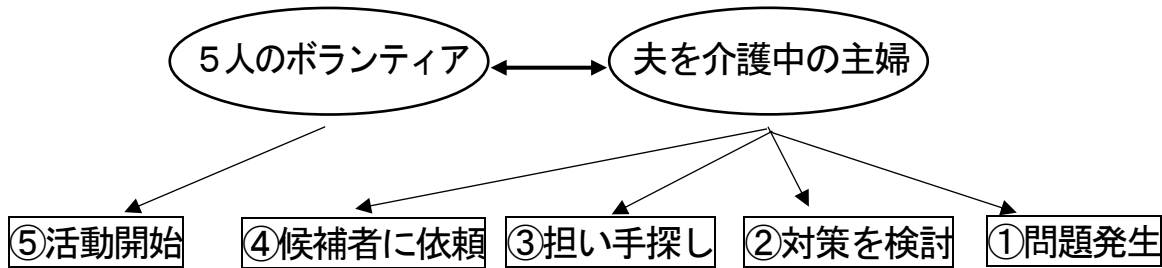


こういう人が、マップ作りの際に、たくさんはいないけど、何人かは登場する。これは一体何だろう。

## ■主婦が何もしなかったら、5人は何をしたらいいか…

私たちは、こんな思い込みをしているのではないかと。助ける側は福祉活動だが、助けられる側の行為は何でもない。自分の困り事を伝え、こういうふうに私を助けてくださいなどと言うのは、お願いに過ぎなくて、福祉活動ではない、と。

しかし、もし彼女が何の行動も起こさなかったら、5人は何をしたらいいのかわからない。彼女がこのように動いているから、ご近所でこれだけの活動が行われているのだ。



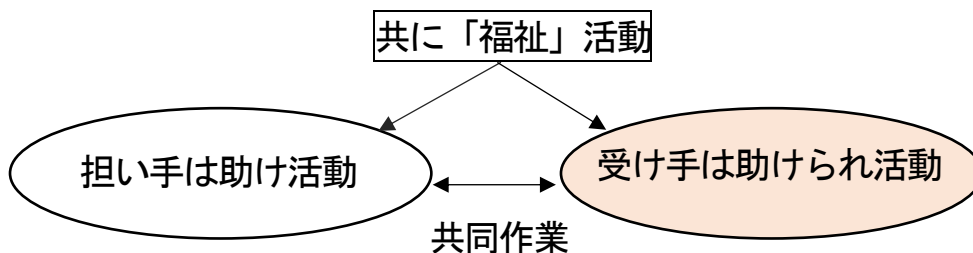
## ■福祉活動の5つのうち4つまでを受け手がやっていた！

上の図を見ていただきたい。福祉活動という営みを5つに分解してみたら、なんとその中の4つまでを受け手である主婦がやっていた！ これでも、彼女は福祉活動は何もしていないというのか。「要援護者」が「お願いする」という行為は全て、福祉ではないという点がおかしいのだ。

もっと簡単に言えば、「助ける」という行為は福祉で、「助けられる」という行為はすべて福祉ではないという単純な見方がおかしいのだ。

## ■体を動かすことが福祉活動だという思い込み

「助け」も「助けられ」も共に福祉活動だったのだ。カギを握るのは、なぜ①②③④は福祉活動と言えないのかである。⑤のように体を動かすことが福祉活動なのだという、これまた思い込みの1つとは言えないか。



## ■助けられる側の役割を並べてみたら、助け行為もあった

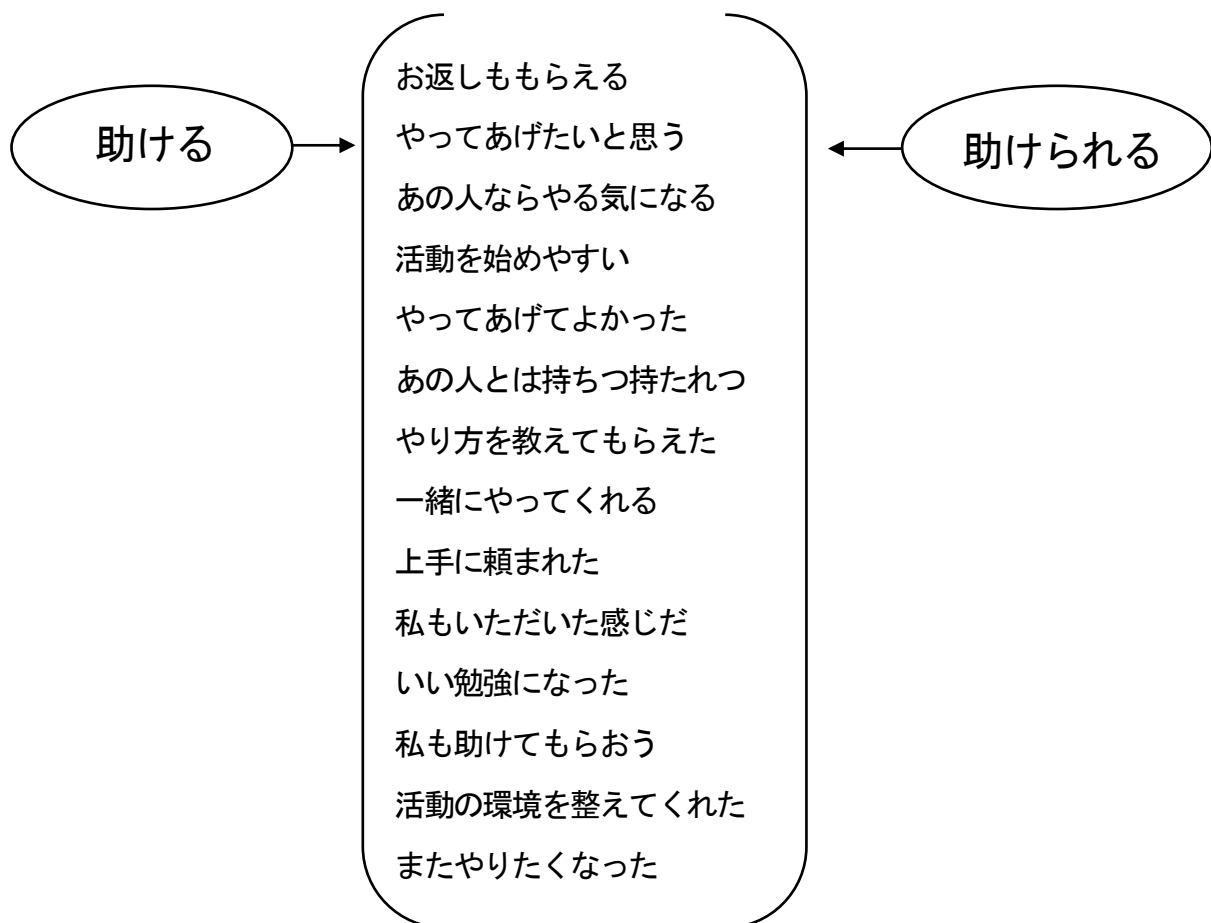
今度は、助けられ側が担うことを拾い出してみた。以下のとおりである。それを、助ける側の視点から表現してみた。助けた側がこのように感じるということだ。

助けられる側は、ただ助けてもらうだけではなく、これぐらいのことができれば、本当の助けられ上手と言えるのではないか。やることはいくらでもあるのだ。今は彼らには全く何も期待されていないので、こういう行為がなされていない。それでは担い手もやる気が出ない。

## ■「助けられ」を突き詰めれば助け手への助け行為だった

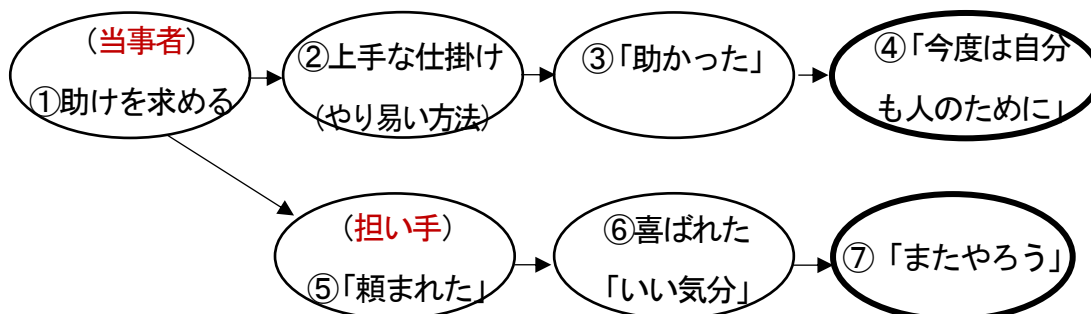
受け手がやるべきことを改めて見直してみると、意外なことが見えてくる。これらの行為の中に、じつは受け手が助けの役割を果たしているとみられるものがあるのだ。

担い手に、やりたいと本気で思わせるためのあの手この手は、じつは受け手の担い手への行為、つまり助け活動とは言えまいか。やはり、助け手と助けられは、突き詰めていけば一体だった。助けられの行為も、よく吟味すると、助け行為と見なせるのだ。



# 「助け」と「助けられ」の好循環

助けを求めれば、担い手も受け手も「もっと人のために」となる？



## ■「助かった」感動が、「今度は私も人のために」となる

助けと助けられがうまく循環すると、どちらも「助け」への意欲が湧いてくるということがわかってきた。図を見ていただきたい。理想的にいけば、こうなる。

まず①当事者が助けを求める。その当事者は一般の当事者でもいいし、児童生徒でもいい。②その当事者は助けてもらう際に、あれこれ工夫を凝らした。お礼に短歌をプレゼントしたり、やり易い方法を教えたり。③助けてもらった結果、当事者は「助かった」。そしてそれを当事者が上手に担い手に伝えることで、担い手は「いい気分」になる。授業でキャンパスのゴミ拾いをさせられた学生が、いざやってみたら気分が良くなって感動したという場合もある。その成果次第で、「またやろう」あるいは「もっと本格的にやろう」ということになる。

今度は当事者の方だが、頼んだ結果、相手の助けを得て問題は解決し、「助かった」。その感動が、「今度は私も人のために尽くそう」ということになる。

というわけで、担い手は「またやろう」、当事者は「今度は自分も人のためにやろう」、ということになる。1つの行動が、担い手と受け手の双方に活動意欲を生じさせるのだ。

## ■当事者がリードすれば、最終的には双方の活動意欲が喚起される。

このフローの特徴は、担い手と当事者の双方に、それぞれの理由で活動意欲が湧き出てくるということだ。そうなるポイントになるのは、活動の結果について、当事者がどのように感想やお礼を伝えるかという点だろう。もう1つは、満足できる結果になるように、当事者の方がいろいろ仕掛けを施すこと。

そしてその始まりは、当事者が担い手に「お願いする」こと。当事者がリードする形の助け合いで、最終的には双方が活動意欲が喚起される。

ここでは事例は割愛してあるが、1つだけ紹介しよう。④の「今度は私も人のために」の部分で

ある。各地で「助けられ上手講座」を開いてきたが、その時に必ず、参加者に自分の「助けられ体験」を書いてもらっている。

その文のほとんどが、同じパターンなのだ。助けてもらって感動した、だから今度は私もだれかを助けたい、である。

以前、こんなニュースがあった。電車で女性が急に具合が悪くなって戻ってしまった。すると、近くにいた男子高校生が素早くワイシャツを脱いで、床をきれいにし始めた。彼はさらに、他の乗客が持っていたティッシュを女性に手渡した。おかげで電車は少々の遅れだけで済んだという。

彼は、このように行動した理由について、記者にこう話したという。小さい頃、自転車で転んでケガをしてしまった。その時、通りかかった見知らぬ男性がハンカチを出して、これで拭きなさいと言ってくれた。そのことが忘れられず、いつか困っている人がいたら、絶対に見て見ぬふりはしないで手をさし出そうと心に決めたというのである。

## ■助けられ体験は昔なのに「自分もやろう」という動機付けは薄れない

興味深いのは、自分が助けられたのは、遠い昔のことなのに、それから何年、何十年と経っても「自分も人を助けよう」という動機付けは少しも薄れないということだ。助けられ体験は、私たちが想像している以上に、本人に強いインパクトを与えるらしいのだ。

そうすると、当事者がリードする形の福祉というのは、なかなか効率的ではないか。困った時に助けを求める。頼まれた方は、またやってあげようと思うし、頼んだ方も、今度は自分も人のためにやろうと思うのだから。